

ここ竹山に暮らすことにしてから何かとお世話になっているMさんが、しきりと「石塚さん何か実のなる木など植えないのかい」と言ってくれて、ご推薦のマルメロの木を植えたら、そろそろ実がなるかなという時にネズミにかじられて枯れてしまった話は以前に書いたと思う。その後もMさんは「植えないのかい」を連発してくるのだが、マルメロのトラウマが尾を引いてその気になれなかった。なんせ、ブルベリーなら良い苗を買ってくればその年から収穫を楽しめるが、桃栗三年柿八年ではないがそれなりの果実を得ようと思ったら、そもそも古希の私で間に合うのか。ということだ。それでも同じ年のMさんが、これから果樹園をつくるという構想をもっているいろいろ育てているのを見ると、そう簡単に余生の可能性を自分で閉じてしまうのは勿体無い気もしてくる。

ちょうどそんな時に、コロナで中断していたブドウの苗木の頒布会が再開されるという情報を得た。ブドウの苗木はこのホームセンターに行っても売っているのだが、その頒布会は北海道でワイン醸造の草分けで町立のワイナリーをもつI町が年に一度、一日だけ行うものなのだ。北海道では、比較的温暖なY町などをはじめワイナリーが急増しており、山梨、長野に次ぐ全国三位の数になっている。その草分け的存在のI町だが、冬の最低気温がマイナス二十八度を下回る年もあったほど寒さが厳しいというハンディがある。そのような土地でも育つワインを探し、品種改良を重ねる努力によって「十勝ワイン」というブランドをつくりあげたのだが、それでも課題があったのだ。どうしても冬の間は棚から枝を下ろして雪の下で保温しないと凍ってしまうのだそう。そのたいへんな手間からブドウ栽培農家を救うために、さらなる品種改良を重ね生まれたのが「山幸(やまさち)」と「清舞(きよまい)」という品種だ。いずれも寒さに強い野生のヤマブドウを掛け合わせてつくった品種で、これだと棚をそのままにしても越冬できるのだそう。そして、その「山幸」は、国際認定機関によって日本固有種として三番目の品種登録をされるに至ったという。いわゆるピノ・ノワールとかカベルネソービニオンだとかの品種名と同等にヤマサチが認められたということのようだ。その「山幸」の苗が頒布会で入手できるのだ。これには大いに気が引かれた。

お隣でも食用の葡萄棚があるが、やはり冬になると枝を下ろさなければならぬという。もし「山幸」や「清舞」を手に入れることができれば、枝を下ろさなくて済むのでブドウの生垣ができるのだ。これは、殺風景な我が家の碎石だらけの駐車スペースにもってこいだ。それにブドウは痩せた土地でも育つというメリットがある。大事なのは水はけだが駐車スペースは水はけを第一に碎石だらけにしたのだからうってつけと思われた。それに、苗を植えてから三年で収穫できるようになるというではないか。今のところそれまでは生きていることができそうな気がする。

そうと思えば立ったら頒布会に向けて植える場所を決めて、植える穴を掘るなど準備をはじめなければならぬ。それが、また、大変だったのだ。

